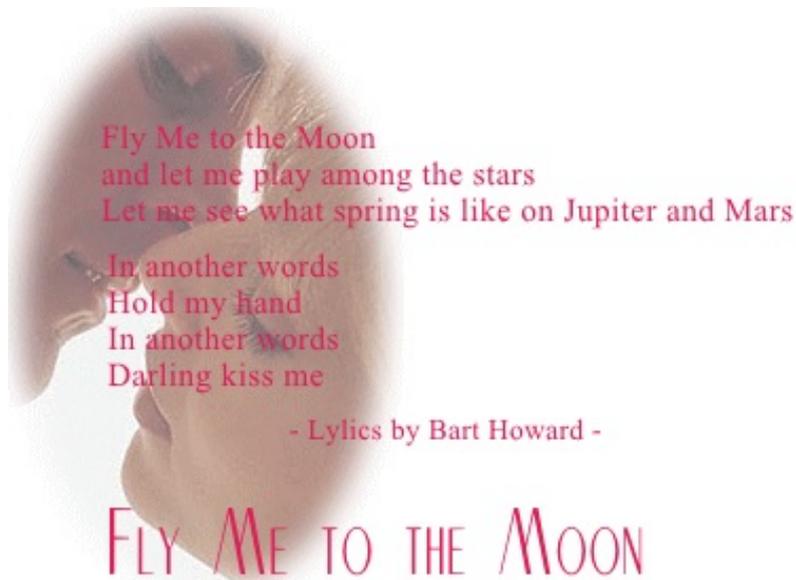


# Short Love Stories



神原 涼



シートベルトを締めて、チラッと横を見ると、あいつがマジな顔してサイドブレーキ外した。

へえ、こんな顔して運転するんだあ。

いきなりアクセル踏むから、ガクッ！ ブォォォ〜ッ！

「キャー——！ つぶないなあっ、もうっ！」

「わ、悪りい」

あいつは険しい顔で前だけ見て言った。

「ちょっとお、なに緊張してるのよ？」

「してねえよ」

「してるわよ、怖い顔しちゃってさ」

「生まれつきだって」

「あ、そっか」

「エッ？ 俺、怖え顔か？」

「自分で言ったのよ、生まれつきだって」

「おおお、信号だ信号」

「信号がどうしたのよ？」

「赤だから止まんねえとな」

「あたりまえでしょ？」

あいつはゆっくり信号の手前で止まった。

「セーフ」

「何がセーフなの？」

「この線からな、出ちゃダメなんスよ」

「だからなに？」

「出てねえだろ？」

「だったらなに？」

「俺って運転うめえなあって」

「バッカじゃない？」

ポカポカ天気の日曜日。

だからって、こいつとドライブしてるわけじゃない。

ましてデートなんかじゃ絶対ない！

こいつはうちのお父さんの会社の従業員。

そして私は社長令嬢！ オホホホ。

っていっても、小っちゃな塗装屋だけどね。

「あっ、あっ、ちょ、ちょっと、そこ左に曲がるのよ？」

「ひ、左？」

「ちょっとお！ 通り過ぎちゃったじゃないよ！」

「わ、悪りい」

「あっ、ちょ、なに、キャー——！ バックしちゃダメ——ッ！」

キキーッて急ブレーキかけるから、ガクン！って、

「つぶないなあっ、もうっ！」

あいつはフ〜って息吐いて、おでこの汗をグイッてぬぐった。

「ちょっと、あんた！ 免許持ってるんでしょ！」

「持ってるって、ほれ」

あいつがジープのポケットから免許出して見せた。

「先週バッチシ取ったから安心しろって」

「先週っ!？」

「んっとはもっと早く取れるはずだったんだけどなあ、筆記で4回落ちちったあ、へへッ」

「あ、あんた、免許取り立てだったの？」

「あれ？ 知らなかったっけ？」

「知ってたらぜーったいあんたに頼まなかったわよ！」

「な〜んでよ？ ちゃ〜んと免許あんだぜ？」

「あんた、もしかして、免許取ってから運転するのこれが初めて？」

「ピンポーン」

「降りるっ」

「あ、ちょ、待てよ、ダ〜イジョウブだっつうの」

「大丈夫じゃない！ ぜんぜんない！」

「絵里子」

「なんで呼び捨てよっ？」

あいつがグイッと私の両肩をつかんだ。

「ちょっと、なにっ？」

「俺を信じろ」

「ハ？」

「な？」

「信じられないけど、時間がないから早くして！」

「っんだよなあ、ダ～イジョウブつつってんじゃ～ん」

空港まで、こいつに送ってもらうことにしたのが間違いだった。

でも、お父さんに頼めないしさあ、頼めないわよ、反対してるんだもん。

まあ、ハッキリ反対とは言わなかったけど、いい顔しなかったし、

最後までいいよとは言ってくれなかったなあ。

今日私はアメリカに発つ。

彼の待つアメリカへ...私の婚約者の元に。

会社の先輩、入社して少しして付き合ってくれてと言われて、

それからずっと... そして、去年の12月にプロポーズされた。

そうよ、クリスマスに。

ありがち？ ほっといて。

ところが、突然彼がアメリカに転勤することになって、「一緒に来てほしい」って言われたの。

結婚は9月にするつもりだったから、ちょっと驚いたけど、行くことにした。

どうせ結婚するんだもん、ちょっと早くなっただけよ。

なのに、お父さんたら、

「アメリカなんか嫁に出すつもりはないぞ」って、永住するわけじゃないんだから！

2～3年？ まあ長くて5年って言ってたけど、たまには帰ってくるんだし、

だいたいアメリカだろうと日本だろうと、家を出るのは変わらないのに、

ったく、何かんがー

キッと車が止まった。

「今度はどうしたのよ？」

「のど渴いてねえか？」

「べつに」

「ちょっと買ってくっからよ」

あいつは道路沿いの自販機指差して、外に出た。

やれやれ、ちゃんと着くんでしょね？

自販機の前に立つあいつ。

当てようか？ ぜったいコーラ！

ほらね！

あいつコーラばっかだもん。

あいつが家に来たのが...私が大学4年になる春だから、3年前？

中学卒業してすぐに来たのよね。

あの頃はまだ幼い顔して可愛かったのになあ。

この3年でベロベロ身長伸びるし、ヒゲは生えるし、はあ～、成長したもんだ！

中身はガキのまんまだけどね。

施設から来たのよ、小さい頃に親が死んじゃったとかで。

施設の子なんてちょっと怖かったけど、まあ確かに中学卒業したばかりなのに、

髪は金髪だわ、ピアスしてるわで、あ～あだったけど、悪い子じゃないのよね。

今日だってさ、「俺が送ってやるよ」って。

お父さんが、「タカ、いいんだ、ほっとけ」って言ったのに（ひどいと思わない？）、

「俺、送りますよ、社長、会社の車借りていいスカね？」って、

結局お父さんに（しぶしぶだけど）うんって言わせたもんね。

でも、まさか免許取り立てだとは思わなかったわよ！

「おまた～」

あいつが缶を持って戻ってきた。

「ほい、絵里子さんはこれだろ？」

あいつが私に手渡したのはミルクティー。

そうよ、私はこれ、わかってるのね。

まあね、家に住み込みしてるんだから、わかるよね、3年も一緒に暮らしてればさ。

「俺さあ、18になったんだよね」

「知ってるわよ、3月にお母さんが誕生祝いしたじゃない」

「もうおとなよ、俺」

「ま～だガキよ」

「パチンコ屋だっで入れんだぜ？」

「前から入ってたじゃない」

「堂々とつう意味だよ！ んで、酒も煙草もOK！」

「それは20歳になってから！ ていうか、あんた、家に来る前から吸ってたでしょ」

「でもよ、18になんなきやぜってえできねえってことあんじゃん」

「ハ？ ああ、免許ね」

「それもだけどよ、もっと大切なのがあんじゃんよ」

「なによ？」

「結婚だよ、結婚！」

「ハア～？」

「男は18になったら結婚できんだよ」

「だからなに？」

「結婚できるっつってんだよ」

「あんた結婚したいの？」

「してえっつうか...」

「カノジョいるんだあ」

「いねえよ」

「いないの？」

「悪りいかよ」

「へえ」

「へえってなんだよ？」

「べつに」

ふうん、カノジョいないんだあ、いそうだけどね。

だっで、ほら、顔はいいじゃない？

身長だっで高いし、スラッとしてるし、黙ってたらかっこいいわよ。

しゃべるとバカだっで！ アッハッハッ！

「な～にニヤニヤしてんだよ？」

「べつに」

「なんだよなあ」

「ほら、ちゃんと前見て！」

空港まで一時間半。

無事に着くんでしょうねっ？

さっきからず〜っと、前の車がノロノロ走ってる。

「まったくよおっ、だから初心者マークはイヤだっつうの！」

「あんただって初心者でしょ」

「俺は運転うめえんだって」

「そうは思えないけどねえ」

「マジマジ、最初はチビ〜ッとだけ緊張したけどよ」

「ほら、やっぱり緊張してたんじゃない」

「それは、絵里子乗っけるからさあ」

「絵里子・さ・んっ」

「絵里子...さん」

「よし」

「あいつは...」

「え？」

「カレシはなんて呼んでんだよ？」

「絵里子よ」

「そんで絵里子は」

「さんっ」

「は、なんて呼んでんだ？」

「英樹さんよ」

「なんだよ、婚約者なのにさんづけすんの？」

「だって先輩だったんだもの、先輩って呼ぶのはヘンだから...なんとなくね」

「三原先輩か」

「そうよ」

「まったく、トレえんだよっ」

あいつはグイッとアクセル踏んで追い越しをはじめた。

「ちょ、ちょっと、危ない！ 危ないってば！」

「トロトロ走ってらんねえっつうの！」

「アゝ―――ッ！ ト・ト・トラック―――ッ！」

対向車線の前から来るトラックを急ハンドルでギリギリ避けて前の車の前につけた。

し、心臓が...ドクドクって...あ...クラッと...め、めまい...

「セーフ！」

「セーフじゃないわよ！ ぶつかるところだったのよっ!？」

「ダ～イジョウブだって！ つうか、大丈夫だったじゃんよ」

「冗談じゃないわよっ！ こんなところで死にたくないからねっ！」

「死なねえよ」

「あんたと一緒なんて死んでも死にきれないわよ！」

「死んでねえじゃん」

「まして向井塗装店なんて書いてる軽トラの中でなんてぜったいイヤ！」

「どこならいいんだよ？」

あいつが可笑しそうに言った。

「アメリカ行きの飛行機ん中か？」

「不吉なこと言わないでよ！ まだ死にたくないわよ！」

「だから死なねえって」

「死にそうだったでしょ！」

「死なせねえよ、ぜってえ」

「あたりまえよ！」

「死なせるかよ、惚れてんだからよ」

黙って

あいつの顔を見ると

あいつはチラッと私の方を見て

また前を向いた

「わかってんだろ」

「なにが？」

「俺がずっとおまえを好きだってこと」

こいつに送ってもらったのは失敗だったかも...

よりもよって、こいつに...

「あれからだって、俺は絵里子が好きだったよ」

「ほら、また前からトラックが来るわよ」

「絵里子はもう...つうか、最初っから俺のことなんか、なんとも思ってねえかもしんねえけど」

「ねえ、この車はどこに向かっているの？」

「成田じゃんよ」

「そう、成田、私は国際線に乗ってアメリカに行くのよ」

「知ってるよ」

「そうよ、婚約者のところに行くの」

「わかってるよ！」

あいつはイライラした声を出した。

「わかってっから、アッタマくんじゃんよ！」

「もうとっくの昔に終わったことでしょ？」

「かもしんねえけど」

「かもじゃなくて、そうなのよ」

「俺ん中じゃぜんぜん終われねえんだ」

「じゃ、終わらせなさい、はい、終わり！」

「俺はあんとき生んでほしかったんだ」

「もう終わりって言ったでしょ」

「絵里子が妊娠したって言ったとき」

「終わりよ」

「俺、すんげえ嬉しかった」

「やめてよ」

「絵里子が墮ろすつつたとき、俺、生んでくれつつって」

「やめて！ もうやめてよ！」

「絵里子に、あんた何歳だと思ってるのって、結婚もできないくせに勝手なこと言うなって」

「今さらそんな話したってしょうがないでしょ！」

「わ～っかってるよ！ 絵里子はアメリカ行くんだろ！ あいつんところによ！」

「そうよ」

「結婚すんだろ、あいつと... そんで、あいつの子ども生むんだ...」

「そうよ」

「俺じゃダメなんだよな？」

「やだあ、なに言ってんの？」

「俺は親もいねえし、施設育ちだし、中卒でアッタマ悪りいしよ」

「そんなこと言ってないでしょ？」

「俺なんか相手になんねえってこったろ」

「相手もなににも、あんた自分が何歳かわかってるでしょ？」

「18だよ！ もう18だ！」

「まだ18よ」

「だからなんだっつうんだよ！ またガキ扱いすんのかよ！」

「もうやめようよ、こんな話、バカみたい、終わったことじゃない、終わったのよ、あのとき...」

こいつの・・・ 孝広の子どもを墮ろした...あのとき...

産婦人科の待合室で孝広はずっと待っていた。

安静室から出てきた私を、孝広は泣きそうな目で見上げた。

「俺、マジだったんだ」

あいつは前を向いたまま・・・

「絵里子は俺のことガキにしか見てくんなかったけど、俺、マジで絵里子が好きだった」

「アハハ、あんたね、ちょっと感傷的になってるだけよ」

「ちげーよ！」

「ほら、三年も一緒にいれば多少は情が湧くっていうの？ それだけ！

明日になったら忘れちゃうわ、お互いにね」

「忘れねえよ！ 俺は！ 俺は...忘れらんねえよ...」

「孝広くん、忘れなさい、あんなこと、ね？」

私はあいつの肩をポンポンと叩いた。

「あんたの未来には可愛い女の子がわんさか待ってるんだから！ 明るい未来じゃない！」

「あんときもそう言ったよな」

「そうだっけ？ そうかもね」

あいつは黙り込んで...

私とあいつは...もう何も言わずに... 成田に向かった。

## 空港

---

車の窓から見上げると、雲ひとつない空を飛行機が飛んでいく。  
あれはどこに向かっているんだろう。

もう少しで着く。  
もう少しで私は飛行機に乗って彼の待つアメリカに旅立つ。

あいつが車を駐車場に入れた。  
「あんたもう帰っていいわよ」  
「見送りするよ」  
「しなくていいわよ、あとはチェックインして飛行機に乗るだけなんだから」  
「見送らせてくれよ」

帰ってほしかった... 今ここで...  
見送りになんてこないでほしかった...

なのに、あいつはさっさと私の荷物をつかんで、車にカギをかけた。

空港内は、大きな荷物を持った人たちがあっちに行ったりこっちに行ったり、  
国際線ってカンジよね。

「ちょっと早く着きすぎちゃったかなあ」  
チェックインする時間まで一時間も余裕だよ。  
「あんた、ほんとにもう帰っていいわよ、ここにいてもすることないし」  
「いいよ、いるよ」  
「ボーッと座ってるだけよ？」  
「いいよ、いてえんだよ、いさせてくれよ」

帰ってよ...  
そう言いたかった...  
だけど...

「お茶でも... 飲む？」

空港の中のコーヒーショップ。

これからどこかに旅行に行くであろうグループが楽しそうにおしゃべりしてる。

私とあいつは向かい合ってコーヒーを、あいつはコーラだけど... 飲んでいた。

「アメリカのさ...」

あいつがポソツと言った。

「どこに行くんだ？」

「ワシントンD.C.よ」

「それってどこにあんだよ？」

「アメリカの首都よ、ほら、ホワイトハウスって聞いたことあるでしょ？」

「あ～、な～んとなく」

「大統領がいるところ」

「飛行機でさ、どんくらいかかんの？」

「そうねえ、13時間ってとこ？」

「遠いんだな」

「たった13時間よ」

あいつは子どもみたいに上目遣いで私を見て、ストローに口を近づけてコーラを啜った。

ちょっとだけ天然のウェーブがかかった髪...

私の手は...あの髪の感触を知っている...

ストローを持つあの指を...私の皮膚は知っている...

コーラを啜るあのくちびるを...私のくちびるは...

「そろそろ行かなきゃ」

このゲートの中に入ったら、もうこっち側には戻ってこれない。

いいのよ、それで、このゲートの向こうに彼が待ってるんだから！

「絵里子」

あいつが私の腕をつかんだ。

「俺さ...」

あいつが私をジッと見つめて...

「俺... 待ってていいか？」

「ハ？」

「絵里子のこと、待ってていいか？」

「な... なに言ってるの？ あと2～3年、5年後には日本に戻るし...」

「そういうんじゃないよ、絵里子が俺の方見てくれんの... 待っててえんだよ」

「バ、バカじゃない？ 私、結婚するのよ？」

「知ってっけど、でも、俺、絵里子が好きなんだ」

あいつの声が震えて...

「絵里子っきゃ考えらんねえよ...」

そう言って震えるくちびるを噛んで...

「孝広、あんたまだ若いんだから、これから本当の出会いがあるわよ」

「絵里子は俺が嫌れえか？」

「嫌いじゃ...ないけど、私はあんたの相手じゃないってこと」

「俺...絵里子と結婚したかったんだ...あんとき...」

孝広の目から涙が...

「ほんとは俺たちの子ども生んでもらって、そんで結婚したかったんだ、

でも、俺あんとき...まだ16で...結婚できる年じゃなくて...だから...俺...

早く18になりたかった...18んなって...絵里子と結婚したかった...しようと思ってた」

え...

「でも、その前にあいつが現れて、絵里子連れてっちまうなんてよ、

俺の方が先だったのによ、まだ18んなってなかったからよ...」

「孝広、あんたと私は6歳も年が違うのよ」

「んなこと関係ねえよ！」

「あるわよ、あんたが20歳になったら私は26、あんたが今の私と同じ年になったら、

私はもう30なのよ？ 24の男が30の女を好きなままでいられると思う？」

「関係ねえよ！ 年なんて関係ねえよ！ 俺は絵里子が好きなんだよ！」

「あんたはまだ若いから、今はそんなこと言ってるけど、もう少しおとなになったら...」

「なんでだよ！ 若かきゃほんとに人のこと好きになれねえのかよ!?

人好きになんのに年なんて関係あんのかよ!? 俺はずっと絵里子が好きだったよ！

初めて絵里子と会ったときからずっと、ずっと好きだったよ！」

「もうやめようよ、こんな話」

「なあ、ほんとに遊びだったんか？ 俺とのことは絵里子には遊びだったんか？」

「そろそろ行かないと」

「遊びでもいいよ、絵里子が俺のこと好きじゃなくても、俺、いつか必ず俺の方を  
向いてもらえるようにすっからよ！ だから、待ってる、ずっと待ってっからよ！」

私の胸の奥深くにずっとあった...ズッシリと重たい塊が...

小刻みに震えて...私のくちびるも...

「やめてよ！ もうやめて！」

怒鳴りながら私の目からは涙が流れていた。

「なんでこんなときに、そんなこと言い出すのよ！ もう遅いわよ！ 遅いのよ！」

私は泣きながらあいつの胸をバンバン叩いていた。

「私だって、私だって好きだったわよ！」

「え？」

「子どもができて、あんたと私の子どもだつと思うと嬉しくて、でも、16のあんたに  
そんな重たいものを背負わせることなんてできなかったのよ！」

「な、なんであんとき言ってくんなかったんだよ！」

「怖かったからよ！」

「え、な、なにが？」

「あんたが私から離れていくのが...子どもの父親っていう重さに耐えられなくなって...  
あんたの心が私から離れていったら...そう思ったら...怖くて...」

「絵里子...」

あいつの腕が私の身体を包んだ。

「んなことねえよ、ぜってえねえよ」

「あんたにはまだわからないのよ、16のときの恋が永遠じゃないってことが」

「そんじゃ、24の恋は永遠なのかよ？」

「え？」

「あいつとは永遠なのか？ んなことがわかんのか？」

「少なくとも...地に足がついた恋だわ...」

そうよ、彼は年上で、結婚というものが遠いところにある人ではない、  
きっと、彼と結婚したら、一生夫婦でいるんだわ....。

「日本航空 JAL 242 便ワシントンD.C.行きにご搭乗予定のお客様は...」

チェックインのアナウンス...

「もう行かなきゃ」

私はあいつの腕を振り払った。

「絵里子」

あいつが私の手をにぎった。

「俺、多分ずっと絵里子のことが好きだ」

私は何も言わずあいつの顔を見つめた。

「好きでいんの自由だろ」

そう言って微笑むあいつに背を向けて、ゲートの中に入った。

「マミー、もうすぐ着く？」

リサは窓から外を覗いて私に聞いた。

「そうよ、あと30分で着くんですって」

「リサね、着いたら東京ディズニーランドに行きたい」

「着いてすぐはムリよ、落ち着いたら連れて行ってあげる」

「OK」

リサはちょっとだけ肩をすくめてそう言うと、また窓の外を眺めていた。

この子が生まれて4年。

怒涛の4年だったわ。

もちろんリサが生まれたことはシアワセだけど、結婚生活はけしてシアワセじゃなかった。

結婚してすぐの妊娠。

慣れない土地での生活に、初めての妊娠・出産。

彼は何もしてくれなかった。

いつも苛ついていたわ。

休みの日は日本から来た上役の接待でほとんど家にいなかった。

慣れない土地で知り合いもいない、たった一人での子育てで私がノイローゼになっても、

優しい言葉ひとつかけてはくれなかった。

いつも怒鳴り合いのケンカになった。

泣いてばかりいたわ。

「リサはちっとも僕になつかないな」

あたりまえよ、ほとんど家にいないんですもの。

「君が甘やかすからだよ」

なんでも私のせいなのね、リサになつかないことも、自分が浮気することも。

「君が悪いんだ、リサばかりかまって、僕の世話をしてくれないじゃないか」

呆れたわ、まだ2歳の子どもと自分を同列において、それが浮気の原因だと言うなんて。

結局リサが3歳になる前に離婚。

「リサの親権は君にあげるよ」

そうよね、あなたはリサを育てる気がないんですもの。  
子どもを抱えて生活する大変さを味わいたくないのよね。

そのまま日本に帰ろうかとも思ったけど、その頃知り合いになったジェシーが事務の仕事を紹介してくれて、ちょうどいい保育園も見つかったから私は仕事に出た。

結婚してからずっと日本には帰らなかった。  
帰れなかった、彼といたときは気持ち的にそんな余裕がなかったし、別れたあとは金銭的に余裕がなかった。  
でも、去年のニューヨークのあの事件があって、父親から電話があったのよ。  
「リサを連れて帰ってこい」って。  
孫のことが心配だったのね。  
でも、ちょうどよかった。  
私も疲れていたから...  
ずっと...アメリカに来てからずっと...

「マミー、おじいちゃんがむかえにくるの？」

「そうね、多分そうよ」

「ワオッ！ おじいちゃんってこわい？」

「ン... リサには優しいわよ、ぜったい」

「よかった、キャシーのおじいちゃんって、すごいこわいんだって」

「アハハ、そうね、いつもムツとした顔でお散歩してるわね」

「ねえ、日本にいったらお友だちできるかなあ」

「できるわよ、リサは明るくていい子だから、みんなきっとリサを好きになってくれるわ」

「パパも？」

「え？」

「新しいパパもできる？」

「それは... どうかなあ」

「できたらいいなあ」

「リサはパパが欲しいの？」

「前のパパはイヤだけど、やさしいパパならほしい」

「そう」

ごめんね、リサ、マミーはもう結婚なんてしたくないのよ。

シートベルト着用のサインがついて、機体が少しずつ降下しはじめた。

ゲートから出て、迎えの人ごみの中に父の姿を探した。

「マミー、おじいちゃんは？」

「ちょっと待ってね、来てるはずなんだけど...」

4年ぶりだからわからないのかなあ。

「絵里子！」

私の名前を呼び声に振り向いた。

誰？ お父さん？

「や〜っと見つけたよお」

目の前に背の高い男の人が立ちはだかった。

え？ 誰？

日に焼けた顔に笑顔を浮かべて、あら、なに、いい男...って、バカね。

「あのお...」

「俺だよ、俺！ なんだよ、忘れちゃったのかよ！ ったくよお！」

「ハ？」

「孝広だよ！」

「エッ!? ウソ！ 孝広？」

「ったく、忘れんなよなあ」

「だ、だって、あんた、なんか、すごく、おとなになっちゃって」

「ったりめえだろ？ もう22だぜ？」

「あ～... そう... 22... ハア～...」

「マミー、だあれ？」

「あ... えっとね、おじいちゃんの会社の人」

「ウィ～っす！ リサちゃんだろ？」

「リサのこと知ってるの？」

「ああ、リサちゃんのおじいちゃんからいつも写真見せられてっからよ」

「お父さんたら孫バカなんだから」

「もうメロメロだぜ？ 怒っててもリサちゃんの話になるとデレ～ッとなっちまうんだ」  
孝広はそう言って笑った。

「ねえ、マミー、この日人が新しいパパ？」

「え？ あ、ち、ちがうわよ」

「え？ マジ？ リサちゃん、俺のことパパにしてくれんの？」

「ン～、そうだなあ、かっこいいから、いいわよ！ パパにしてあげる」

「おおっ、ヤッタ！」

「なにやってんのよ、あいかわらずふざけてるんだから」

「マジだって」

「ハ？」

「言ったじゃん、俺、待ってるってよ」

「アハハ！ バッカじゃない？ 4年も前のことでしょ？」

「そうっスよ？」

「冗談はもういいから、早く家に連れて行ってよ、クタクタなんだから」

「おっし！ リサちゃん行くか！」

「おんぶして」

「リサ、歩けるでしょ！」

「リサちゃん、ほれ、乗っかんな」

あいつがしゃがんでリサに背中を向けた。

「ウフフ」

リサは嬉しそうにあいつにおんぶした。

「もうっ、あんまり甘やかさないでよね」

「いいじゃんよ、まだ4つなんだからよ、なあ、リサちゃ～ん」

「ねえ、パ～パ」

一瞬... 胸がギュウツと痛くなった... リサ...

あいつを見ると、目を真っ赤にして微笑んでいた。

あいつはリサをおんぶしながら、片手で、スーツケースを引っ張っていた私の手をにぎった。

思い出した...

私の手は...この手を...

この手の暖かさを...

今なら... 握り返せる...

素直に...

あいつの手を...

やっと...

今ならね...

*FIN. April 6 2002*



イライラする。

タカシのサポートの手がいつも一瞬遅いから、ピルエットが回りきれない。

「ねえ、気持ちもう少し早くしてくれない？」

「バランスが崩れるだろ？」

「そんなことないわよ、いつもケイ...」

タカシがチラッと私を見る。

私は顔をそむけて、くたびれたトウシューズの爪先を見る。

「よっしゃ、もう一度アラベスクのところからやろう」

「ごめん、ちょっと休憩する」

私はタカシの顔を見ないままレッスン室のすみの方に歩いていった。

バーにもたれながら、王子のバリエーションを踊るタカシを見ていた。

魅力的だと思う。

どちらかというとな野性的で、テクニックもしっかりしてるし、情緒性もあるし...

でも...

ケイスケの踊り方とはちがう...

ケイスケは典型的なダンス・ノーブル。

優雅で繊細で、王子がぴったりの人。

バレエ団の秋の公演は『眠りの森の美女』。

私が本公演で初のプリマとしてデビューする公演。

新人公演では何度か主役をやってきたけど、本公演では初めて。

嬉しいはずなのに...

私のパートナーはケイスケじゃない...

ずっとケイスケと組んできたのに... 入団してからずっと...

この『眠り...』だって、きっとケイスケと踊れるはずだったのよ...

なのに...

出演者が発表された日に、ケイスケはベルギーに行ってしまった...

ベルギーのバレエ団の団員試験に受かったから...

そんなこと聞いてなかった。

そんな試験を受けていたなんて。

「受かるかどうかわからなかったしさ」

だからって黙っていたなんて、私に... 私はケイスケのパートナーなのに...

ケイスケの恋人なのに...

私は泣いた、泣きながら言った。

「待ってるから」

「いつ戻ってこれるかわからないんだ」

「いい、それでも待ってる、私のパートナーはケイスケしか考えられないもん」

ケイスケはちょっと困ったように微笑んだ。

微笑みながら... 私を抱きしめた。

「お互いがんばろう、自分たちの決めた道なんだから」

「待ってるから...待ってる...から...待って...」

私はケイスケの腕の中でいつまでも泣いていた。

「サラちゃんとタカシくん、パ・ド・ドウのところやるわよ！」

先生の声でハッと我に返った。

こんなこと考えてたってしょうがないのに、公演はあと一ヵ月後に迫ってる。

私の今の相手役はタカシ。

いつもケイスケの代役だったタカシ。

だから何回かは一緒に踊ったことはある。

ケイスケがバリエーションを先生に見てもらってるときとか、そんなときだけ。

それが今回初めて本役になった...

ケイスケがいないから...

しかたないけど... でも... 今だけ... そう... 今だけよ...

ケイスケが帰ってきたら、私はまたケイスケと踊る... 絶対に...

私のパートナーはケイスケしかいないんだから。

メール

---

寝返りをうつと、タカシが優しい目で私を見ていた。

「お... 起きてたの？」

「いや、俺もちょっと前に目が覚めたところ」  
タカシはそう言って照れくさそうに微笑んだ。

私... 私ったら... 何やってるんだらう...

「シャ、シャワー貸して」

私はシーツを身体に巻きつけてベッドから立ち上がった。

シャワーのお湯を頭から浴びて...

なんてことしちゃったんだらう... 私... タカシと...

だって...

ゆうべ...

メールがあったのよ... ケイスケから... 久しぶりだったから嬉しくて...  
最近メールしてもなかなか返事が戻ってこなかったから...  
忙しいんだらうなって思った... 思おうとしてた...

『新しいパートナーができた』

一瞬... なんのことかわからなかった...

頭が真っ白になって... ポーツとパソコンの画面を見つめてた...

『新しいパートナーができた。 シャオ・リンという中国からの...』

新しいパートナー... 私は？ 私はパートナーじゃないの？  
今もケイスケのパートナーじゃなかったの？

『こんなに息の合うパートナーは...』

私は？ 私とじゃダメなの？ ねえ、ケイスケ、私は... 私は...

気がついたら私は真夜中の通りを歩いていて...

なんとなく... タカシに電話してた... なんとなく... 一人でいたくなくて...

そして...

タカシに抱かれながらケイスケのことを考えていた...

ううん... タカシに抱かれて忘れてしまった...ケイスケのことを...あのメールを...  
なのに...

ケイスケのK i s sとはちがう感触のタカシのくちびるを感じて...

ケイスケとちがう指先が...私の身体に触れて...

ケイスケとはちがう声が私の名前を呼ぶ...

「サラ...サラ...」

タカシの指を感じながら... ケイスケの指を思い出す...

そっと胸に押し当てられるタカシのくちびるを感じながら...

ケイスケのくちびるを思い出す...

私の肌はケイスケを憶えている...私の身体はケイスケを憶えている...

私はタカシを受け入れながら...ケイスケを感じて...ケイスケの記憶を...

ケイスケに抱かれる記憶の中で...私は...熱くなっていった...

「バスタオルここに置いておくからな」

タカシの声で我にかえった。

「あ、サ、サンキュー」

サイテー...

私ってサイテー...

淋しいからタカシと寝た... 淋しいから... ケイスケの代わりにタカシを...

どんな顔すればいいの？ タカシに、なんて言えば...

バスタオルをかぶって、濡れた髪の毛を拭きながらバスルームを出た。

「コーヒー飲むか？」

「あ、う、うん」

タカシはジーパンだけ履いた姿でコーヒーを入れてくれた。

がっちりした胸板。

海賊をやったらタカシの右に出る人はいない。

はじけるようなグランジュッテ、しなやかなバネのような動き...

エネルギーが舞台中に広がるような踊りをするんだよね。

「どした？」

「え？ あ、う、ううん、べつに」

「ゆうべ何かあったのか？」

「え... あ...」

「ケイスケか？」

私は... なんて答えていいのかわからなくて... コーヒーカップに口をつけた。

「やっぱりな、だと思ったんだ」

「な、なんでよ？」

「そんなことでもなきや俺んところなんか来ねえだろ」

タカシはそう言って笑った。

「ご... ごめん...」

「バ～カ、あやまんなよ」

「だって...」

「ま、いって、俺はケイスケの代役だかな」

「そ、そんな...」

「つうかさ、ちょっとオイシイ思いさせてもらっちゃったってカンジ？」

そう言って笑うタカシに...

「ケイスケが...新しいパートナーができたって...」

「え？」

「ゆうべメールで...」

「そっか」

「私は...もう...ケイスケにとって...必要ない...」

涙が出てきて...

「ケイスケのパートナーは...もう...私じゃないなんて...信じ...信じられ...」

身体が震えて...涙が止まらなくて...

「泣くなよお」

タカシが私の身体にそっと腕をまわした。

「ダ〜イジョウブだ〜って、ケイスケはサラんところに戻るって」

「だって...ヒック...もう...無理...」

「サラと踊ったら、他のパートナーとは踊れねえよ」

「え？」

「サラの踊りはすげえ魅力がある、一緒に踊っていると余計にわかるんだ、

すんげえ伸びやかでさ、もっともっと自由に踊らせてやりたいって思うんだ」

私はタカシを見上げた。

「マジだって、だから安心しろよ、きっとケイスケはサラんところに戻るからさ」

「そう...かなあ...」

「サラと踊ってる俺が言うんだから間違いはないって！ あっ！ ヤベ！

ケイスケ帰ってきたら、俺また代役に逆戻りだよおお」

そう言って笑うタカシが、なんだか暖かくて...

「タカシ... ありがとう...」

タカシの胸にストンと頭をつけると、タカシが私の頭をなでた。

「お姫さまのお守りも臨時パートナーの努めっスから」

笑いながら、それでも私を優しく抱きしめたままで...

今だけ... 今だけは少し甘えさせて... 今だけは...

## サポート

---

なぜかあの日から、タカシとの練習がスムーズに進むようになった。

「もっと早く手を出してよ！」

「もっと伸びてからの方がいいって！」

「倒れちゃうよ！」

「ダ〜イジョウブだって、いいからやってみ」

「んもうっ」

タカシに言われるままにギリギリまで身体を前に伸ばす。

フワ〜ッと身体が浮くような感覚を感じて...

スッとタカシの手が私を支えた。

「な？ この方がずっといいだろ？」

「う、うん」

ほんとだ... こんな感覚って今までなかった...

タカシのリフトは私を天井高く持ち上げる。

「ちょ... バ、バランス崩しそう」

「ちゃんと受け止めるから安心しろって」

私はタカシの手の上で伸びやかにポーズを取る。

スーッと落下してゆき、すぐにタカシが次の振りへと私を導く。

自分の身体が軽く感じる...

サポートの手を感じないほどに、私は自由に跳び上がる。

空間がすべて自分のもののように感じる。

第三幕のパ・ド・ドゥって、こんなに大きな踊りだったの？

「サラちゃん！　すごくいいわよ！」

先生が驚いたように誉めてくれた。

「踊りがのびのびしてきたわ、それにしなやかさがとっても出てきたわね」

「そうですか、ありがとうございます」

私はハアハアしながら答えた。

「二人は休憩していいわ、次はブルーバード行くわよ！」

タカシと二人でロビーの椅子に座ってミネラルウォーターを飲んだ。

「サラ、すげえじゃん、先生に誉められるなんてさ」

タカシは嬉しそうにそう言った。

「私じゃないよ、タカシのサポートのせいだよ」

「せいって、俺が悪いみたいじゃんよ」

タカシがそう言って笑った。

「タカシって、前からああいうサポートしてたっけ？」

「まあな」

「でも、ケイスケの代役で踊ったときは、あんまり感じなかったけど」

「代役んときはケイスケのやり方でサポートしてたからな」

「え？」

「やっぱ、本役のやり方とちがうとパートナーが戸惑うだろ？」

「だから代役んときは本役のやり方でやるんだ」

「そんなこと考えながらやってたの？」

「ったりまえじゃん、役に立たなきゃ代役降ろされちゃうもんよ」

「そうだったんだ...」

「でも、今は俺が本役だからさ、俺の踊りができんだよ」

そう言って嬉しそうに笑うタカシ...

タカシとパートナーを組むことが、そんなにイヤじゃなくなっていた。

今だけは、本当のパートナーなんだから、ちゃんと踊ろう、私の踊りを。

## 主役

---

いよいよあと3日で本番。

今日から舞台でリハーサルが始まる。

照明を吊るしたり、大道具の修正がされたりしているのを見ると、  
少しずつ緊張してくる。

衣装をつけて、袖から舞台の上を見ていた。

本公演の主役としてあの上に立てるんだ...

「似合うじゃんよ」

声に振り向くとタカシが王子の衣装で立っていた。

シンプルなデザインのきれいな薄い水色の衣装のタカシは、  
優雅な王子だったケイスケとはちがって、とても凛々しい王子だった。

なに... 私... なんでドキドキしてるの...

「どした？」

「え... う、ううん」

「なんだよ、ヘンか？」

タカシはそう言いながら衣装をなでてみせた。

「ううん、似合うよ」

「王子なんてはじめてだもんなあ、いつも平民ばっかでさ」

タカシはそう言って笑った。

そうだよな、いつもケイスケの代役だったけど、  
本番ではパ・ド・トロワやペザントのソリストだったものね。

「舞台使っていいスカね？」

タカシが袖にいた舞台監督に聞いた。

「いいよ」

「ちょっと練習すっか」

そう言って私の手をとった。

タカシの手... 大きくて... 安心できる...

タカシと踊っていると、音楽がなくても心の中で音楽が聞えた。  
どんなに遠くにいても、必ずタカシの手が私をつかまえてくれるから、  
私はのびのびと腕をのばしてそっと空気を抱え込む。

突然、タカシの動きが止まって、私の中の音が消えた。

「どうしたの？」

タカシを見ると、驚いた顔で私の後ろの方を見ている。

「なに？」

振り向くと...

え？

ケイスケ...

ケイスケが袖に立っている...

「サラ！」

ケイスケが走ってきて... 私を抱きしめた...

「サラ！ 会いたかった！」

「ケ...ケイスケ... ど、どうしたの？ どうしてここに...」

「詳しいことは後で説明するよ」

ケイスケはそう言って微笑んだ。

「よう、ケイスケ！」

私の後ろからタカシがケイスケに声をかけた。

「よう、タカシ！ なかなか似合ってるよ」

ケイスケはタカシの衣装を指さした。

「おまえには負けるって」

タカシはそう言って苦笑いした。

場当たりが終わって、休憩に入っていると、  
私とタカシは先生の控え室に呼ばれた。

部屋には先生の他に事務局長、助手の先生たち、そしてケイスケがいた。

なに？ なんの話？

私は不安になってタカシの顔を見上げると、タカシは真っ直ぐ向いたまま口をギュッと結んでいた。

先生が口を開いた。

「サラちゃん、休憩が終わったらケイスケくんと第三幕のバ・ド・ドゥを踊ってみせてほしいの」

「え？」

思わずケイスケの方を見ると、ケイスケが私に微笑みかけた。

なに？ どうして？ どういうこと？

「実はね、ケイスケくんが今所属しているベルギーのバレエ団の幹部が今回の公演を視察しにいらっしゃることになったの。

私も急で驚いたんだけど、ちょうど今があちらの公演のない時期らしくてね」先生はちょっと困ったように微笑んでみせた。

「それで、その結果によってはうちのバレエ団と提携を組みたいということなの。

あっちとしても日本での足がかりが欲しいみたいなんだけどね、

うちとしてもベルギーでの海外公演や合同公演ができることになるのよ。

それにスクール間での交換留学も実現できるという話なの」

先生の言葉が頭の上を流れていく。

それと、今ケイスケと踊ることとどんな関係があるっていうの？

「それでね、あちらの条件として、今回の公演にケイスケくんをあちらのバレエ団所属団員として出演させてほしいっていうの」

「え？」

「もちろんプリンシパルとしてね」

な... なにそれ... だって... この公演のプリンシパルは... 王子は...

タカシの顔を見た。

タカシは黙って先生の方を見ていた。

表情からは彼が何を思っているのかわからなかった。

だけど...

もしも私だったら悔しくて悔しくて泣いてしまうかもしれない。

「とにかくみんなに発表する前にケイスケくんとサラちゃんのパを幹部だけで  
見てみようっていうことになったのよ」

「あ、あの、そ、それじゃタカシは、私... ずっと彼と練習してきたので...」

「わかってるわ、私たちだって悩んだのよ、でも、とにかく今はまず  
ケイスケくんと踊ってみてちょうだい」

先生は、もう何も言わせないといった口調でそう言うと席を立った。

私は... 混乱して... どうしてこんなことに... どうして今さら...

タカシに話しかけようとしたとき、

「サラ！」

ケイスケがそばに来た。

「え... あ...」

タカシは私の方を見ようともせずに、スッと部屋から出ていった。

## 身体の記憶

---

本番さながらに第三幕用の垂れ幕の前。

ケイスケは白に金の刺繍の優美な王子の衣装を着て立っていた。

嘘みたい... ケイスケと踊る... 眠りを...

そう願っていた... 本公演でケイスケとパートナーを組むことを...

だけど... 私は戸惑ってる... ずっとケイスケと踊りたいと思っていたのに...

「それじゃ始めてください！」

先生がマイクを通して各スタッフに声をかけた。

照明が本番用に変わり、そして音が流れた。

ケイスケが舞台に踊り出る。

繊細で優雅な王子。

タカシとはちがう...

私も舞台の上へ。

聞きなれた第三幕の音楽の中、ケイスケとパ・ド・ドウを踊る。

私が手を伸ばすべきところにケイスケの手はある。

そう、これがケイスケのサポート。

私の感覚が思い出してくる...

ケイスケのサポートを... ケイスケとの踊りを...

私の身体は憶えていた...

ケイスケの感触を... ケイスケの手を...

私の手は... 腕は... 脚は... ケイスケと何度も踊った記憶を再現して...

ケイスケと踊る私になっていく。

ラストのポーズを決めて、そしてパ・ド・ドウが終わった。

客席から幹部たちの拍手が聞えた。

「さすがだわ」

暗い客席から先生の声が聞える。

「14才から組んでたんですものね、息がピッタリよ！」  
ケイスケが手をにぎったまま私にニッコリと微笑みかけた。

そう... 私のパートナーは... ずっとケイスケだった... ずっと...

だけど...

私の肌が... 身体が... 感覚が...

「先生、お願いがあります」

考える前に私は声を出していた。

「タカシとのパ・ド・ドウも見てください」

「でも、それはもう...」

「お願いします、見てもらうだけでいいんです」

暗い客席で幹部たちが何かを囁きあう声がした。

「わかったわ、タカシくん、スタンバイしてちょうだい」

客席からタカシが立ち上がって舞台の上に上がってきた。

驚いた顔をして私を見つめながら...

袖でスタンバイしているタカシのそばに行くと、

「っんだよなあ、また代役に逆戻りだよ」

ふざけた調子でそう言って笑ってみせた。

「タカシ、タカシの踊りをして」

「え？」

「ケイスケの代役じゃなくて、私とずっと練習してきたあのタカシの踊りよ」

タカシは私を見つめて... そして... ちょっと嬉しそうに微笑んだ。

第三幕の音楽の中、凛々しいタカシの王子が現れる。

タカシの手の中で私はのびのびと自由に空気をつかまえる。

私がどこにいこうとタカシの手はいつのまにか私の身体をそっと支えてる。

私は踊っている...！

自由に踊っている...！

私の踊りを... これが私の踊り... これが私だったんだ！

天井高くリフトされ私はオーロラのしあわせを身体で表現する。  
そしてスーッと落下していき、タカシの身体に脚を巻きつけてポーズをとる。

音楽が止まっても、私の身体中の細胞が踊る喜びに興奮していた。

やっとわかった... 私...

「サラ」

タカシが私を抱きしめた。

「サンキュー、もうこれで思い残すことねえよ、俺の舞台は今だったよ」

タカシはまだ荒い息でそう言って微笑んだ。

「サイコーの舞台だった、サンキューな」

私からそっと腕を離して袖の中へと消えていった。

## 自分の踊り

---

ケイスケが王子役の『眠りの森の美女』の5日間の公演の幕が閉じた。

急遽青い鳥の役を提示されたタカシは、

「青い鳥は山本の役です、彼にやらせてやってください」

そう言ってコール・ドの中で踊った。

打ち上げパーティーの会場にはベルギーの視察団の人たちも来ていた。

ベルギーのバレエ団との提携の話は本決まりになったらしい。

先生や団員たちはこのニュースに興味していた。

私はタカシを探していた。

話したいことがあるの、タカシに、でも...

タカシは？ 会場を見渡してもタカシの姿が見つからない。

「サラ！」

ケイスケが駆け寄ってきた。

「俺と一緒にベルギーに行こう」

「え？」

「ベルギーで俺とパートナーを組んでくれ」

「でも... ケイスケには新しいパートナーが...」

「あのときは、いや、ベルギーに行く前から悩んでたんだ」

ケイスケはそう言ってちょっと顔を歪ませた。

「ずっとサラとだけパートナーを組んできて、他のパートナーを知らなかった、

サラは俺にとってベストパートナーだと思ってたし、サラにとっても

俺はそうだったと思う、だけど、それでいいのかって、

もしかしたら馴れ合いになってしまっているんじゃないかって...

そして、お互いの成長を止めてしまってるんじゃないかって...

だからベルギーに行って、新しいパートナーと組んで自分の力を試してみたかったんだ」

「そう...なの...」

「だけど、いや、だから、わかったんだ、俺のパートナーはサラしかいない」

ケイスケはそう言って私の手を強く握った。

「ケイスケ... 願いがあるの」

夜のリハーサル室に私とケイスケだけ。

「まさかまだレッスンしようって言うんじゃないよな」

ケイスケはそう言って笑った。

「第三幕のパ・ド・ドゥを踊ってほしいの」

「今？」

「今」

「いいよ」

ケイスケは苦笑いして、更衣室に入っていった。

デッキのスタートボタンを押してスタンバイした。

音が流れて、ケイスケが中央に踊り出る。

私は...

すべてを忘れて... ただ私の踊りを踊る...

のびのびと自由に空間をつかもうと伸ばす手は、ケイスケの手を離れて...

バランスを崩した私をケイスケがあわてて抱きとめた。

「サラ！ どうしたんだ？」

「いいから続けて！」

グランジュッテをする私を降ろそうとしたケイスケの手に抵抗する私の身体...

「サラ！ 何してるんだ！ 危ないよ！」

「いいから！」

リフトされる私はもっともっと上へと伸びて、ケイスケがバランスを崩して、私を抱きとめたまま床に倒れた。

「サラ！ ダメだ！ これ以上やったらケガするよ！」

そう言って音楽を止めた。

「どういうつもりなんだよ？ メチャクチャな踊りじゃないか！」

「これが私の踊りなの」

「え？」

「わかったのよ、私、わかったの、ケイスケと私はベストパートナーじゃないわ」

「なに言ってるんだよ、先生たちだって...」

「ケイスケの言ったとおりよ、私たちお互いに成長を止めていたんだわ」

ケイスケが驚いた顔で私を見た。

「私、ケイスケと踊ると楽しかった、息がぴったりだと思ってた、

でも、ちがったのよ、私はただケイスケの差し出す手に合わせてただけ」

「え？」

「ずっと一緒にやっていたから、ケイスケがどこに手を出すかわかったた、

私はケイスケに甘えてたのよ、ケイスケに合わせていれば楽しかったから、

自分で踊ろうとしてなかった、ケイスケに踊らせてもらってただけだったの」

ケイスケは黙って私を見つめていた。

「ベルギーには行かない、ケイスケのパートナーにもなれない、

私は私の踊りをしたいから」

ケイスケはフウ〜ッと息を吐いて、そして苦笑いした。

「そういうことか」

「うん」

「だったら急いであいつのところに行った方がいいぞ、

この公演が終わったら、すぐに田舎に帰るって言ってたから」

「エッ？」

「まだアパートにいると思うから早くいけよ」

「う、うん」

私はあわてて荷物をかき集めた。

「ケイスケ、私が何を言いたいかわかったのね」

ケイスケはニヤッと笑った。

「何年パートナーやってたと思ってるんだよ」

「ケイスケはサイコーのパートナーだったよ」

「振ったくせに何言ってんだよ」

そう言って苦笑いするケイスケの頬にキスをして、私はリハーサル室を出た。

## 夢

---

タカシは驚いた顔で私を見た。

「ど、どした？」

「話があるの」

そう言いながらタカシの肩越しに見た部屋の中はガランとしていた。

「あ... 悪いんだけど、俺、今から...」

「帰らないで！」

「え？ な、なんで知って...」

「お願い、私のパートナーになって！」

「ハ？」

「私、タカシとパートナー組みたいの！ タカシと踊りたい！」

「でも、あの、ケイスケが...」

「タカシなの！ タカシじゃなきゃダメなの！」

タカシはポカ〜ンと口をあけて私を見ていた。

「だからお願い、田舎には帰らないで、ここにいて、一緒に踊って」

タカシはちょっと困ったようにくちびるを噛んで、

「中に入るか？」

そう言って私を部屋の中に入れてくれた。

何もない部屋の中で床に座って向かい合っていると、なんだか急に照れくさくなった。

「その格好のままで外歩いてきたのか？」

タカシは私の練習着を指差して苦笑いした。

「タクシーだけどね」

タカシはちょっと微笑んでみせて、そして、まじめな顔になった。

「俺さ、主役取られたから田舎に帰るとかそういうんじゃないんだ」

「え？」

「あっ、そう思ってたなあっ」

タカシはふざけたように私を指差してそう言った。

「ちょっと...だけね」

「そこまでしょっぱくねえよ」

タカシはそう言って笑った。

「それじゃ、どうして？」

タカシは私を見つめて、そして...

「俺のおふくろ、田舎で小さなバレエ教室やってるんだ」

「そうなの？」

「ああ、すんげえ小さいんだけどな」

タカシはそう言って照れくさそうに笑った。

「前からさ、帰ってきて教室やってくれって言われてたんだ、  
なんせおふくろも年だしさ、まあたんでもいいような教室だけど、  
若い頃からやってたから潰したくないんだってさ」

タカシのこういう話を聞くのははじめて...

ううん、お互いこういう話なんかしたことなかった...

一緒に踊るだけだった...

「俺もさ、せっかくこのバレエ団に入ってハンパで終わんのやだったからさ、  
もう少し待ってくれって、いつも伸ばし伸ばしにしてたんだ。  
そんで、今回はじめて本役で主役になって、おふくろも喜んでさ、  
教室たんでもいいなんて言いだしちまってさ」

タカシはそう言って笑った。

それほど大きな意味があったんだ... タカシにとって... あの役は...

「俺さ、夢が叶ったんだよ」

「え？」

「これだっていう俺の踊りを踊りたいって夢...

サラ、あんとき言ってくれただろ？ タカシの踊りを踊ってって」

「うん...」

「はじめてだった... あんなにのびのびと自由に踊れたのは...」

「え？」

「俺、いっつもケイスケの代役ばっかやってたからさ、なんつうの？

代役根性が身についたつうかさ、つい相手役に合わせちゃうってか...

でも本役でそれはマズイだろ？ 自分の踊りが踊れなきゃ意味ねえもんな、

でもさ、サラと踊ると、自由に踊れるんだ、そんでサラにももっと自由に踊って欲しくなるんだ、サラが自由に踊れば踊るほど、俺も自由になる... その最高潮がああときだったんだ。

すげえ満足だった、公演で主役張れなくたっていいと思った、そんなことどうでもよくなったんだ、それくらい俺は俺の踊りを踊れたんだ」  
タカシはそう言って微笑んだ。

「これで帰れるって思ったんだ、帰っておふくろの教室をやろうって」  
そう言いながら横に置いてあったボストンバッグをポンポンと叩いた。

「それじゃ... やっぱり... 帰っちゃうの...」

「ああ、世界クラスになれば別だけどさ、公演だけじゃ食ってけないし、地方の教室で担ぎ屋やって稼いだり、バイトしたりさ、もう少しおふくろが年とったら俺が面倒みなきゃなんねえし、やっぱ男だから現実考えちまうんだよな」

私は... 何か言いたくて... 何も言えなくて...

「悪い、そろそろ行かねえと電車なくなっちゃうからさ」  
タカシは時計を見ながらそう言って立ち上がった。

アパートの前、タカシは私に手を差し出した。

「がんばれよ、サラが主役の舞台は必ず観に行くからさ」  
そう言って私の手をにぎった。

タカシの手... 大きくて... 安心できて... いつも私を...

タカシの背中が夜の闇の中に消えていく。

私はタカシが見えなくなっても、暗闇の奥を見つめ続けていた。

## 私のパートナー

---

東京ではとっくに散ってしまった桜が、通りをきれいなピンクに染めている。  
さっき通りがかりの人に聞いた細い道を真っ直ぐに歩いていく。  
今年は桜が二回見れてラッキーかも...なんて思いながら。

信じられないものでも見ているようにポカ〜ンと口をあけてるタカシは、  
少し髪の毛が伸びて、凜々しい王子のようで、私はドキドキして...

「ど、どした？ いや、あの、なんで、ここに...」

私は大きく息を吐いて...

「私のパートナーになって！」

「ハ？」

「やっぱりタカシじゃなきゃダメなの、タカシとじゃなきゃ踊れないの」

「だ、だって、サラ、おまえ、つい先月だってイギリスのクリスと組んで、  
すげえ評判よかっただろ？ それに、その前はアメリカの...」

「そうよ、いろんな人とパートナー組んだわよ、全部評判よかったわよ、  
クリスにはイギリスでパートナーとしてやらないかって言われたわよ」

「すげえじゃん！」

「断ったけど」

「マジかよっ!? クリスだろ？ 今世界の中で注目浴びてるクリスだろ？」

「だってイヤなんだもん！」

「おまえ、世界中のバレリーナに恨まれっぞ」

タカシはそう言って苦笑いした。

「ダメなの？」

「え？」

「私のパートナー」

タカシは困った顔をして私を見た。

「お願い、いろんな人と組んでも、ううん、組んだら余計にわかったの、  
私のパートナーはタカシじゃないきゃダメだって」

「サラ... 俺はもう... 別の世界にいるんだよ」  
そう言って自分の肩越しに教室の中を指差した。  
「わかってる、わかってるわよ、だけど... ううん... だから...」

言いたいことがうまく言えなくて...  
思いが溢れすぎて言葉にならなくて...  
涙が溢れて...

「サラ、泣くなよ」  
「だって...」  
「ほら、中に入れよ」  
タカシが私の肩を抱いてドアを閉めた。

小さな教室の床に座って、タカシの入れてくれたコーヒーを飲んだ。

「サラ、駅まで送ってくよ」  
そう言って立ち上がった。  
「バレリーナがレッスンさぼって、こんなところに来んなよな」  
タカシはそう言って笑った。  
「それが... 答えなの？ タカシの答えなの？」  
タカシは一瞬顔を歪めて、  
「さ、送ってくぞ」  
そう言って私の腕を引っ張った。  
「イヤ！」  
私はタカシの手を振り払った。  
「サラ」

タカシがしゃがんで私の顔を覗き込んだ。

「俺さ、もう踊れねえんだよ」  
「え？」  
「冬にさ、屋根の雪下ろしして滑って落ちて脚骨折しちゃったんだ」

タカシは練習着のズボンの裾をあげて脚を見せた。  
太くて長いケロイドみたいな傷痕がひざから下へとついていた。

「ぜんぜん踊れないってことはねえんだけどさ、もう大きい舞台上で通用する踊りはできねえんだ」

涙がポロポロ流れて... タカシ... どんなに辛かっただろう...

「タカシ...」

私は泣きながらタカシの首に抱きついた。

「なんでおまえが泣くんだよ」

タカシは指で私の頬の涙を拭きながら、

「泣いたのは俺だって、すんげえ痛かったんだぞ」

そう言って笑った。

「な？ だから俺はおまえのパートナーにはなれねえんだよ」

「いいの... 踊れなくてもいいの...」

「な～にバカなこと言ってんだよ、踊れねえパートナーなんていねえだろ」

「タカシが踊れないなら、私も踊れない」

「サラ、んなこと言うなって」

「ほんとなの、タカシとじゃなきゃ踊ってても楽しくないの、好きなバレエなのに、つまらなくて、心が、どこか死んでて...」

「タカシがいないと... ダメなの...」

「そんなこと... 言うなよ...」

タカシの顔は苦しそうに歪んで...

「そんなこと...言うな...よ... そんなこと言うと...俺...」

そこまで言うとタカシは大きく息を吐いて、

「さ、行くぞ、今からなら3時の電車に間に合うな」

タカシはグイッと私を抱き上げて立たせた。

車の中も駅に着いてからも、私とタカシは黙ったままだった。

ホームに下りると東京行きの電車が待っていた。

「早く乗った方がいいぞ、もう発車するから」

タカシはそう言って私の肩を乗降口の方にそっと押した。

タラップに立った私に荷物を渡そうとするタカシに...

「タカシ、ひとつだけ聞いていい？」

「ン？」

「私のこと... 好き？」

タカシは私を見つめて...

ドアの閉まる合図が聞えた。

「愛してるよ」

私は...

タカシに向かってダイブした。

すぐ後ろでドアが閉まる音がした。

電車がゆっくりとホームを離れていく。

「サラ！ 危ねえだろ！」

タカシは私を抱きとめたまま怒ったように言った。

「大丈夫、タカシは絶対に私を受け止めてくれるってわかってるから、  
だって、タカシは私のパートナーなもの」

タカシは私を見つめて...優しい目で見つめて...そして...

抱きしめた... 強く...

私たちは手をつないだまま駅を出た。

FIN.            Oct. 24 2002

## 短編-Stay with me : Sitting on the bench

---



夕闇の中 ベンチに座ってる私。

息が白い...

12月のこんな寒い中で ベンチに座ってる私。

バカみたい

わかってるけど 今はどこにも行きたくない どこにも行くところがない

あの人の言葉が まだ私の胸に突き刺さって ドクドクと血を流してる  
氷のように冷たい言葉なのに熱いほどに痛い

愛されてると思ってた 愛してるって言ってたから  
あの人の腕の中でなら 安心して生きていられるって思った

錯覚？ 思い込み？ 妄想？ それにしてはリアルだったけどね。

結局さ、人間なんて一人なんだよね、生まれたときも死ぬときも、いつも...  
一人じゃないなんて錯覚で、そう思いたかっただけで、  
そう思わなきゃ淋しすぎるから...

でも...

二人でいても淋しいなら 一人でいるのと変わらないじゃない  
うん 二人でいるのに淋しいなんて もっともっと淋しいよ

寒い

このままここにいたら凍死するのかな  
それもいいかも  
なんだか生きてるのがかったるくなっちゃった  
いつもどこかで傷ついて いつも淋しくて いつも苦しいなら  
終わらせてしまいたい こんなチンケな人生なんて

でもさ 凍死すればいいけど、ハンパに冷え切って風邪引いたただけだったら  
バカみたい 熱出して咳が止まらなくて鼻水ズルズルで生きてるの  
かっこ悪い かっこ悪いっていうか イヤだよ 風邪引くなんて

どこか喫茶店に入って熱いコーヒーでも飲もうかな

ちょっとまって 凍死するんじゃないの？  
だって風邪引くのはイヤだもん

その前に煙草一本吸っていこう

カチッとライターをつけると小さな赤い火が ちょっぴりだけ暖かそうで  
ふうっと煙を吐くと どこまでが煙草の煙で どこまでが白い息なのかわからない  
ふう〜っと いつまでも息を吐き続けてみた  
白い息が冷たい空気の中に消えていく

小さい頃よくやったっけ  
煙草吸うかっこしてフーーッて白い息出して  
息出しすぎて苦しくなってハァハァしちゃって

「火い貸してくんない？」

「えっ？」

いつのまにか ベンチの端に若い男が座ってた。

や、やだ いつからいたの？

ぜんぜん気がつかなかった ぼんやりしてたんだ 私

「なあ、火、貸してくれよ」

「え... あ... ど、どうぞ」

ライターをベンチの上に置くと、

「サンキュ！」

そう言って手に取った。

カチッと火をつける音

ふうっと息を吐き出す音

「サンキュ」

男が私の方にライターを差し出した。

少しだけ 指が触れた 温かった

「飲む？」

「え？」

男が湯気のがあがってるワンカップを見せた。

「え... い...いえ...」

なにこの人... ヘンな人...

「温ったまんぞ」

だって 知らない人なのに 突然そんなこと言われたって

「こっち、口つけてねえからさ」

そう言って私の手にグイツと押しつけた。

あったかい

両手に挟むと温ったかくて  
飲みたいな 飲みたくなっちゃった

「そ、それじゃ、少し...だけ... いただきます」

コクンと飲むと熱いお酒がのどから身体の中に入っていくのがわかる  
冷え切ってた身体の中にすーっと入って行って  
なんだかほ〜として身体の力が抜けた

「ありがとうございました」  
ワンカップを男に返すと、彼は受け取ってゴクンと一口飲んだ  
そして、また私の方に差し出した。

「え？」

彼はまるで「おまえの番だ」というようにカップを渡した。

私も黙って受け取って もう一口 コクン  
そして 彼に返して 彼が飲むと また私の方へ

二人とも黙ったまま ひとつのワンカップを交互に飲んだ

一口飲むごとに 肩の力が抜けて 身体中の神経が柔らかくなっていった

なにやってるんだろう 私 ぜんぜん知らない人と ワンカップ分け合って  
言葉も交わさず ただひとつのカップを分け合って

でもね でも なんだか心地いい なんだかホッとしてる 私

知らない人なのに 何も話なんかしてないのに  
ただこうやって 黙って二人で座ってるだけなのに

なぜだか 私 ずっとこうしていたい

ううん 少しでもいい もう少しだけ こうしていたい

## In his arms

---

「そんじゃあな」

突然 男が立ちあがった

「え？」

行っちゃうの？

...って、バカみたい、行くよ、そりゃ、関係ない人だし。

彼は空のワンカップを持って歩き出した。

なんだか急に淋しくなった

バカみたい 知らない人なのに ただベンチのとなりに座ってただけなのに  
一緒にワンカップ飲んだけど それだけなのに

またひとり ベンチに座ってる私

なんとなく なんとなく さっきまで彼が座っていた場所に手を置いてみた  
ほんのり温かい

バカみたい 恋人でもなんでもない人なのに  
なに感傷的になってるの？

あ... 雪が降ってきた

ほんとにこのままここにいたら凍死しちゃうかも

「なあ、ずっとここにいるつもりか？」

顔をあげると 彼が立っていた。

も、戻ってきたの？ なぜ？

「え... あ... ええ...」

だよな、こんなところに一人で座ってる女なんて、ヘンだと思ってるよね

彼はドカッと私のすぐとなりに座った。

「入れよ」

そう言ってジャケットの前を開いた。

「ハ？」

「風邪引くぞ」

そう言って私の肩を抱くように自分の上着の中に包み込んだ。

温かい空気が 彼の体温が 私を包んで 暖かくて

知らない人なのに なぜこんことするの？

なぜ私は 抵抗もしないで 彼の腕の中にいるの？

だって...

温かいんだもの すごく すごく

不思議... こんなにホッとしたことなんてあったかな

知らない人なのに 安心する この中に包まれてると

でも...

もし 強姦魔だったら？ それとも強盗？ それとも殺人鬼？

だけど 温かい こんなに 彼が誰かは知らないけど

この腕の中が暖かいことだけはほんとで

身体のが力が抜けていく

なんだかトロトロ眠くなって

このまま死んでしまったとしても いいや 暖かいから

彼の胸の中で 彼にの肩に頭をあずけて

私は目を閉じた

ポタンと頬に冷たい雫が落ちてきて 目を開けた

なに？ 溶けた雪？

少しだけ顔を上げると 彼の目から涙が流れていた

「ど、どうしたの？」

彼は私の視線に気づいて顔をそむけた。

「大丈夫？」

「ああ」

そう言って開いていた方の手で顔をぬぐった。

「なにか... あったの？」

彼は私をチラッと見て微笑んだ。

「べつに」

そう言うと、ぎゅっと私を抱きしめた。

「暖ったけえ」

どこの誰かも知らない人なのに 抱きしめられてもイヤじゃなかった  
うん 暖かくて すごく暖かくて

彼が私のあごにそっと指で触れて

「はじめてだ」

「え？」

「あんた... すげえ暖ったけえな」

なにが？

そう聞こうとする私のくちびるに彼のくちびるがそっと重ねられて  
冷たいけど柔らかくて  
名前も知らない彼のくちづけは とても優しかった

K i s sをして 見つめあって 私たちは何も言わないままベンチから立ち上がった。

そして 名前も聞かず 黙って手を振り合って 雪の中で別れた。

## Angel descended!

---

あの雪の日から二週間が過ぎた。

私は恋人と別れた。

「さよならしよう」

そう言うと、彼は

「俺のどこが悪かったんだ、言ってくれよ」と苛ついた声で言った。

「あなたといても淋しいから」

わけがわからないというような顔をした彼に背を向けて私は部屋を出た。

仕事をしているときも、一人で部屋にいるときも、

あのときのことを思い出す。

あの人は いったい誰だったんだろう

誰でもいい だって あのときの暖かい感覚は今も私の中に残っていて

あのときのことを思い出すと 心が暖かくなって とてもホッとするから

もしかしたら 天使？

バッカみたい！ 煙草吸ってワンカップ飲む天使？

でも ほんとに天使かも そうよ そう思っておこう

その方が楽しいから

だって あのときのことは ほんとのことなのに 現実じゃないみたいで

夢みたいで 思い出すと しあわせなきもちになって

もしかしたら 私は 天使に恋をしてしまったのかも...！

二度と会えないけど 会えないよね どの誰かもわからない

うん 天使だから もう会えないんだね

「上原さん」

「は、はい」

やだ、ボーッとしちゃってた 工作中なのに

「悪いけど、窓のブラインド下ろしてきてくれる？ 清掃会社が窓拭きしてるから」

「はい」

お局さまの言うことはなんでも聞かなくちゃ。

自分で下ろせばいいでしょ！なんて、絶対言えない。

窓のそばに行くと上からゴンドラみたいなのが下りてきた。

よくこんな高いところで仕事できるよね、怖くないのかな

ブラインドを下ろそうと横の紐を引いたとき、ゴンドラがちょうど窓のところにきた。

乗っていた清掃会社の人と目が合っちゃった。

スルスルッとブラインド下ろすと下の隙間から覗いてる

やだ、なに？

スルスルスルッと下まで下ろすと、今度はドンドン窓を叩く音

な、なによ？ 何かあったの？ ま、まさか、誰か落ちた？

あわててブラインドを上げると、さっきの清掃員がこっちを見てニカッと笑った。

ハ？

汚い軍手の指を自分の顔に向けて、大きな口あけて何か言ってる。

ハ？

オ？ エ？ オエって？

ジーーーーッと口元を見て...

それから目を...

「あっ！」

「上原さん！ どうしたの？」

「い、いえ、な、なんでも、ないです」

彼だ... 彼だ！ あの夜のあの人だ！

彼はジェスチャーで下に来るように言った。

私はうなづいて、ブラインドを閉めて部屋から走り出た。

エレベーターを降りて、受付を走りすぎて玄関に出た。

えっと... どっちだっけ？

右、右の窓！

通りに面した方に走っていくと、ゴンドラが下に下りてきた。

天使が 降りてくる 私の元に

私は彼の方に走っていった。

彼は大きく腕をひろげて私を抱きとめた。

ああ この腕の中 そうよ この腕の中が 好き

「また会えるなんて思わなかった」

彼は愛しそうに私を抱きしめながら言った。

「会いたかった ずっと なんでだか ずっと 忘れられなかったんだ」

「よかった... あなたが...」

天使じゃなくて

だから 会えた また 私たち こうして

私たちは道路の真ん中で抱き合っていた

お互いの体温を感じあうように あの日のことが夢じゃないかったことを

確かめ合うように ずっと ずっと

## Stay with me

---

あの雪の夜 彼のお父さんが亡くなったんだと彼は言った。

彼のお母さんは何年も前に亡くなって、お父さんとは離れて暮らしていたという。

「ほんとの夫婦じゃねえんだ、なんつうの、愛人ってやつでさ」

彼はそう言って ちょっと淋しそうに微笑んだ。

自分のお父さんの最後の顔も見れずに お葬式にも出ることができなかった彼...

「あんときさ、一人で通夜してたんだ、ワンカップで」

彼はそう言って笑った。

「気がついたら、おまえがいてさ、最初はライター借りるだけのつもりだったんだけど

なんか... 一緒に通夜やってもらいたくなかったっうか」

「え？」

「いや、なんつうの、ただ一緒に酒飲んでくれればいいなあと思ってさ」

「言ってくれればよかったのに」

「言えるわけねえじゃん、初めて会ってさ、知らねえヤツと一緒に通夜やってくれって  
言われたらビビんだろ」

「黙ってお酒渡されたってビビったわよ」

「ハハハ！ でも、おまえ、飲んでくれたよな」

「なんとなく...ね 寒かったし」

彼は私の肩を引き寄せて

「あんときさ、おまえがそばにいてくれて、俺 なんだかホッとしてたんだ」

そう言って私を見た。

「な～んにも言わないで二人でいるだけで 淋しくなくなったた

どこの誰かも知らねえんだけどさ このままずっとこうしていたいって」

「でも、立ちあがって帰ろうとしたじゃない」

「帰らなかったじゃんよ、つうか、帰りたくなくなった、だから...」

彼が私の身体に腕をまわして...

「戻ったんだ... おまえのところに... 名前も知らないのに...

一緒にいたくて... ずっと...」

彼の腕の中は 温かくて 私はここにいるだけで安心する

何も言わなくても そばにいたい そう思ってくれることが  
私には嬉しくて 私はここにもいいんだって思える  
ここにいてほしいと 彼が思っていてくれるから

FIN. 12/25 2002